

【1】 表現説明の3要素（タイプ・種別、内容、意図・効果）

- *ある特定の「表現」について「説明する」とは、(1) その「表現」のタイプ・種別、(2) その「表現」の表す内容、(3) その「表現」を用いる意図・効果、以上の3点を説明することである。
- *問題とされる「表現」は、多くの場合、何らかの表現技法（比喩、象徴など）に分類され、特定の内容を表すとともに、その表現技法が読者にもたらす効果を狙って採用されている。それら基本的な表現技法の知識は必須である。

(例)「雪がしんしんと舞い降りる」という表現は、「しんしん」という擬態語と「舞い降りる」という擬人法を用いることによって(1)、雪が空中を静かに巡りつつ落下するさまを(2)、読者の具体的な想像を喚起する効果を意図して(3)描写している。

→ 表現説明の解答形式=ある表現技法によって、特定内容を、その表現技法の効果を意図して、描写している

- (1) 表現技法のタイプ・種別の指摘（マーク式ではその正誤）
 - ……比喩・象徴・感覚的描写、語りと視点（焦点）・現在形の使用、記号と表記など
- (2) 表現された内容の説明（マーク式ではその正誤）
 - ……人物の心情、人物像、場面の印象、展開、筆者の主張（評論）など
- (3) 表現技法の効果・使用意図の説明（マーク式ではその正誤）
 - ……具体的な想像を喚起する・暗示する、現実味（臨場感、生き生きとした印象、リアリティ）を与える、強調する（際立たせる、目立たせる、浮彫りにする）など

要注意 傍線や選択肢中の「この表現の説明」である。本文中の他の表現や内容としては妥当であっても、「この表現」に該当しない説明は、不可である。また、「表現技法のタイプ」、「表現された内容」、「表現効果・意図」の各々の説明が単独で正しいだけではなく、それらの間の連関・整合性にも注意すること。さらに、複数の箇所の「表現」について問われている場合、それらのすべてに該当するかどうか、慎重に検討すること。

(選択肢の例) ……本文中の「○○」「△△」などのように、擬人法を用いることによって、主人公の動揺する心情を、生き生きと描いている。

- 検討1 「○○」「△△」は、どちらも本当に「擬人法」なのか？
- 検討2 「○○」「△△」は、どちらも本当に「主人公の動揺する心情」なのか？
- 検討3 「擬人法」によって「生き生きと」させることが本当に可能なのか？
 - *選択式では、「内容上の誤り」「表現技法と内容との連関の不整合」が多い
 - *表現技法の効果・意図の説明の正誤判定は最も難しいので、時には保留として他の選択肢を吟味する

【2】 表現技法の基本タイプ

① 比喩・象徴・感覚的描写（モノ的描写）

○比喩……「コトの内容」Aを「モノ的表現」(A)によって描写する。(比喩の場合、(A)はたとえであり、文字通りの意味ではない)

(例) 国内の混乱は、もはや泥沼(A)と化した＝(泥沼のように) 抜け出せない悪状況Aとなった

- A は(まるで) ……比喩内容(たとえられる内容・コト……抽象的・精神的・観念的・心理的)
- ≠ ……類似性・共通点
- (A) (のよう)だ ……比喩表現(たとえている表現・モノ……具体的・物質的・感覚的・生理的)

*比喩では(正確には、直喩・隠喩・擬人法・声喩では)Aと(A)とに類似性(共通点)が成立する。したがって、比喩問題の解答法は、傍線部(比喩表現)との類似性を意識しつつ、モノ的表現をコトの内容(正解)へと置換することである。なお、類似性とは異なる原理の比喩(換喩、提喩など)もあるが、設問例は少ない。

- *比喩は、基本的には「語の本来の意味とは異なる用法」である。ある表現が「比喩であるか/ないか」については、その表現が「文字通りの意味でないか/あるか」で判断するとよい。この点で、比喩と象徴とは異なる。ただし、言語・記号はすべて広義には「象徴」であり、比喩もAを暗示するという点で「象徴的」と言うことはできる。
- *よくある疑問: 市役所の職員「梶氏」の訪問を「市役所がやって来た」と表現した場合、「やって来た」のは人間の「梶氏」なのであるから、当然擬人法ではない。「梶氏」を「市役所」と表現した比喩(換喩)である。
- *よくある誤謬: 擬人法を「無生物主語」と比較しようとするなど、単なるナンセンスである。日本語の修辞法と英語の構文というカテゴリーの違うものを比較しようとする非論理的な誤謬である。

○象徴……「コトの内容」Aを「モノ的表現」(A)によって描写する。(象徴の場合、(A)は単なるたとえではなく、文字通りの意味をも表している)

(例) 国道のいたるところに、瓦礫(A)が散乱していた＝国道の瓦礫は、国内の荒廃Aを象徴している

- (A) (例:「ハト」)は ……象徴表現(象徴している表現・モノ ……具体的・物質的・感覚的・生理的)
- ≠ ……類似性・共通点
- A (例: 平和)を象徴する…象徴内容(象徴されている内容・コト……抽象的・精神的・観念的・心理的)

- *象徴では、(比喩と同様に)Aと(A)とに類似性(共通点)が成立する。したがって、象徴問題の解答法は、傍線部(象徴表現)との類似性を意識しつつ、モノ的表現をコトの内容(正解)へと置換することである。
- *象徴は「同時に複数の意味(Aと(A)と)を表す表現(明示と暗示の多義性)」である。象徴であれば、その表現の「文字通りの意味(A)」が成り立っている。小説の場面内で、実際に「ハト」がいるはずである。
- *「天使のようなハトの群れ」では、「ハトの群れ」は実在すれば象徴であるが、「天使のような」は比喩である。

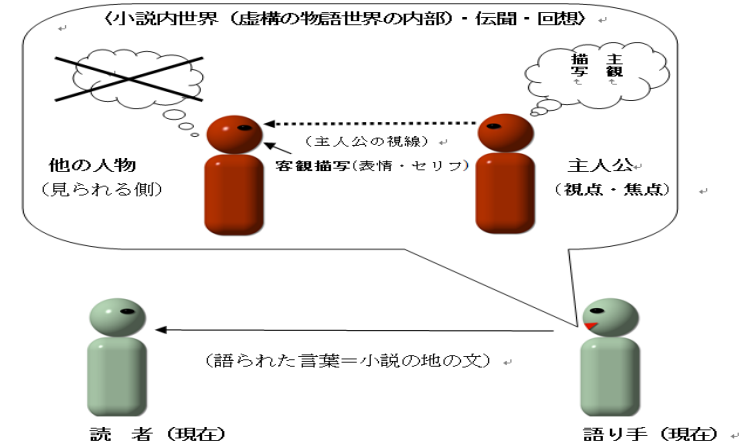
○感覚的描写……「感覚(五感＝視覚・聴覚・嗅覚・触覚・味覚)に訴える表現(色・音・匂い・肌触り・味などの描写)」によって、読者に具体的な印象・想像をもたらす。

(例) 透けるような青空に白くいわし雲がたなびき、飛びかう赤とんぼの羽音が微かに伝わる。(視覚・聴覚)

(例) 彼の甘く香しい言葉に惹かれ、心の底まで垂れてしまいそうになった。(味覚的・嗅覚的・触覚的)

*感覚的描写(感覚に訴える表現)は、視覚や聴覚といった身体に備わる「感覚器官」に由来する経験を前提とする点で、広義には比喩や象徴と同様に、「モノ的表現」の一種(A)に分類することができる。その表現効果もまた、「具体的な印象・想像を促す」という点で比喩・象徴と共通点があり、しばしば実際に比喩や象徴でもある。

② 物語論(ナラトロジー)関連……語り・視点・焦点化、主観と客観、現在形の使用・引用表現の省略等



○「物語（ここでは小説）」の基本構造と問題となりやすいケース（前頁のモデル図も合わせて参照すること）

……「語り手（地の文章）」が「聞き手（読者）」に、「登場人物たちの世界の出来事＝物語（≒小説）」を「語る」（「語る」とは、叙述されている地の文章が朗読されているようなイメージで理解するとよい）。物語内の出来事は、**語り手が登場人物（多くは主人公）の視点から語るのが基本**であるが、ときに視点が移動する。また、「語り手」は、**読者が読んでいる現在、「読者」と向き合う形で、過去の物語内容を過去形で語るのが原則**である。

(case-1) 太郎（主人公）は、次郎（他の人物）が笑ったのを見て、不愉快だと感じた。
「笑った」……他の人物の心情を、主人公の視点で、外部から客観的に語っている（叙事的）
「不愉快だ」……主人公の心情を、主人公の内面に即して、主観的に語っている（叙情的）
「と（感じた）」…「～と言った」「～と思った」などは、**語り手による引用形式**の叙述である

(case-2) 太郎（主人公）は、次郎（他の人物）が笑ったと聞かされて、顔色を変えた。
「顔色を変えた」……主人公を外部的に見る視点がある。（視点の移動）
他の人物が主人公を見ていないとすれば、**語り手の視点**である

(case-3) 太郎（主人公）が顔色を変えたのを見て、次郎（他の人物）は兄の怒りを悟った。
「顔色を変えた」……主人公を外部的に見る視点がある。（視点の移動）
「（次郎は）見て、～悟った」……他の人物の視点から、主人公について語られている

(case-4) 太郎（主人公）は、次郎（他の人物）が笑ったのを見て、生意気だと思ったのである。
「笑った・思った」……人物たち（他の人物・主人公）の言動や心情の描写（**過去＝回想**）
「のである」……読者に対して、**今（現在）、語り手が直接語りかけている（語り手の現在）**

(case-5) 私（主人公）は、弟（他の人物）が笑ったのを見て、生意気だと思ったのである。
「思った」……**主人公「私」**の言動や心情の描写（**過去＝回想**）
「のである」…**語り手「私」**が読者に対して、**今（現在）、直接語りかけている（語り手の現在）**
* **一人称単数型主人公**（「私」「僕」など）の場合、「私は～」という語りの形式上、「**他の人物の視点から語られる**ということ、不可能である。

(case-6) 弟（他の人物）が笑っている。私（主人公）はそれを見て腹を立てた。
「腹を立てた」……人物の言動・心情（**過去形で回想内容を語る → 原則通り**）
「笑っている」……人物の言動・心情（**現在形で回想内容を語る → 生き生きと伝えるため**）

(case-7) 椰子（主人公）は、あのとき一度だけ夫の実家を訪れたのだった。
「（訪れた）のだった」……語り手の現在から見る過去（**過去形で回想内容を語る → 原則通り**）
「あのとき一度訪れた（のだった）」……人物の現在（語り手からは過去）から見た過去（**過去完了的**）

(case-8) 弟（他の人物）は口をとがらせた。兄さんのせいだ。私は黙っていた。おまえ自身のせいだよ……。
「兄さんのせいだ」「お前自身のせいだよ……」……カギ括弧や「～と言った・と思った」の省略。（**引用表現の省略により、語り手の存在が希薄になり、その分、場面・人物が生き生きと読者に伝わる**）

* そもそも小説は**虚構**であるからこそ、**現実味（臨場感・生き生き）を高めるための様々な工夫**をする。逆に言えば、小説・物語であることを読者に意識させる「語り（手）」の存在性を希薄化しようとするのである。

* 「語り手（地の文）」「読者（聞き手）」「人物」といった表現は、あくまでも狭義の「**物語（≒小説）**」という**虚構の構造を説明するための概念（構成要素名・用語）**であるから、**現実的・具体的に生身の人間などをイメージすると混乱する**。「語り手＝作者」という誤解や、主人公が1人称単数「私」であると語り手も「私」となるので「登場人物＝語り手＝作者」といった誤解をしやすい。「読者」という概念でさえ、本文を読んでいる、実在のあなた自身のことではないと考えるべきなのである。また、入試では選択肢中の表現は様々な言い換えられるので、「語り手」「視点」といった**語句をただ覚えるのではなく、内容を正しく理解することが大切**である。

③ 記号・表記

○**記号**……ここでは、文字以外の符号類を指すものとする。**記号**は文章中（文字群）で使用されると、文字とは異なるため、それだけで目立つ（際立つ）ので、**常に「強調表現」となる**。

括弧類	「」・（ ）・〈 〉 など	句読点	句点（。）・読点（、）
ダッシュ	—	三点リーダー	……
疑問符	？	感嘆符	！

(例)「さすがにおじさんは、父のことをよく御存じですね。……（おやじは嫌ってたけどな）」
→ 「」はセリフ（実際の発言）、（ ）は内心の本音、……は両者のズレを、それぞれ際立たせている。
(例)「シル、ク、ロード、です」
→ 読点（、）を多用して、発言する人物のゆったりとした話し方を表し、しかも、際立たせている。

* 記号は、「？（疑問）」「！（感嘆）」のように、それ自体の表す固定した意味を持つものもあるが、カギ括弧（引用・強調・特殊なニュアンスの付加）のようにいくつかの用法のあるものや、「……」のように特定の用法が固定しているわけではなく、その都度色々な用途で用いられるものもある。このため、**特定の記号には特定の用法・効果があると決めつけるのは危険**である。他の設問では正解であっても、別の設問でも正解とは限らない。
* 「強調（表現）」は、英語における強調構文や、日本語における強意の助詞「こそ」などのような、構文・文法レベルのものよりも広義に捉えるべきである。表現技法としての「**強調**」の**基本は、「他と異なる・相互に異なることによって、コントラスト（対照）で際立つ（目立つ・浮彫になる）」**という点にある。したがって、黒板とチョークで書かれた部分のコントラストのように、一方に重点のある対比表現はすべて強調（対照）効果を持つし、漢字と平仮名中心の文章中にカタカナや記号類が用いられていれば、一目瞭然と目立つ。また、**倒置法**は、見ただけでは目立たないが、読めば、**通常の語順とは異なることによって、その文が強調される**。このように、他と異なる・通常と異なることは、すべて対照による強調効果を持つのである。

○**表記**……「表記」とは、広義の「表現」とは異なり、とくに文字・記号で表し記すことを言う。つまり、文字種（漢字・平仮名・カタカナ・ローマ字）の問題であると考えればよい。たとえば、「寒い」という語を「カタカナ表記」すれば、「サムイ」となる。

(例)「彼は愛石家ですよ」「……アイセキカ？」
……カタカナは表音文字であるから、表意文字である漢字とは異なり、「音声のみ聞き取られたが、意味は分からない」というニュアンスを表現するのに用いられやすい。

* カタカナ表記は、音声イメージを読者に与えるので、**擬音語、外来語、セリフ**に採用されやすい。

④ その他の表現技法

○**回想場面の挿入（物語の構成上の問題、時系列の重層化）**

……「回想場面」とは、ここではごく通常の、「物語内で過去が想起されているシーン」と考えてよい。言葉を変えて言えば、物語の時系列が一直線ではなく、いったん過去の場面に戻っている、ということである。（前述の「回想内容を現在形で表現する」という意味での「回想」ではない。こちらの「回想」は、物語全体が「現在の語り手から見て過去である」という意味である）。物語の通常の進行（単線的な時系列）中に、「回想場面」や「夢・空想・手紙・劇中劇」などを挿入すると、**物語の進行が複雑化（重層化）することによって作品内容が多層的・多面的に膨らむ**。これによって読者は、多様な角度から作品を深く鑑賞することになる。

○**余情表現（余韻を残す描写）**

……「余情表現・余韻」とは、**あえてすべては表現しないことで、その省かれた表現・内容について、読者の想像を促す**という表現技法である。体言止め（「～秋の夕暮」）や、セリフ末尾の「それは……。」などは、本来であればその続きに、たとえば「（秋の夕暮は）わびしかりけり」「（それは）あなたのためにしたことなのに」などがあろうと、読者各自が各自の想像力に基づいて想像することができるわけである。